



文教大学の授業

2024.7.11 No. 89

文教大学教育研究所
埼玉県越谷市南荻島3337
TEL 048-974-8811 フax 343-8511



英語科教育法

－英語好きで英語力のある生徒を育てる教員の養成－

国際学部 阿野 幸一



埼玉県立高等学校・中学校、茨城大学での英語教員を経て、2007年に文教大学国際学部に赴任。専門は英語教育。大学での英語教員養成に加え、年間を通して全国各地で教員研修会の講師や授業改善の支援をしている。NHKラジオ講座『基礎英語』の講師を8年間務め、現在はNHKテレビ高校講座『英語コミュニケーションⅠ』講師、TOKYO FM『山崎怜奈の誰かに話したかったこと』の英語コーナーにも出演中。小学校・中学校教科書『NEW HORIZON』編集代表。(あの こういち)

英語を通して世界を知り、自分の考えを発信できる英語教育が求められている。国際学部での国際社会や異文化理解等に関する学びを生かすことで、題材を大切にした英語の授業を構築することができる。学部での学びを土台に、1年次から3年次にかけての「英語科教育法Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」の系統的な指導を通して、力のある英語教員を養成し、教育現場に送り出している。

1. 4年間をタテとヨコにつなぐ科目配置

国際理解学科の新入生の約半数は教員を進路の1つと考えていて、英語教職課程への登録は50名程度でスタートする。こうした状況を踏まえ、「英語科教育法」の授業は1年次秋学期から始まる。英語の授業作りについて学ぶことで、英語教員を目指す上でどの程度の英語力が必要かを具体的に知ることができ、4年間の英語学習への指針となり、教員として教壇に立つまでの道のりを示す狙いもある。4年次の教育実習に向けて、「英語科教育法」ⅠからⅣまでの履修が条件になっており、1年次から3年次までタテにつなぐ継続的な指導が行えるように配置している。

- ①英語科教育法Ⅰ（1年次秋学期）…英語授業作りの基本となる学習指導要領が求めている指導や、聞くこと・話すこと・読むこと・書くことの具体的な指導について学ぶ。
- ②英語科教育法Ⅱ（2年次秋学期）…小中高の連携や生徒中心の授業作りのための指

導技術、テストの作成と評価などについて学ぶ。

- ③英語科教育法Ⅲ（3年次春学期）…「英語科教育法」ⅠとⅡで学んだ内容を具体的な指導に生かすため、2人一組になって指導案作成と模擬授業を行い、クラス全員で指導改善のための議論を行う。中学校と高等学校の検定教科書を用いて両校種の実践を行うため、クラスを2分割している。
- ④英語科教育法Ⅳ（3年次秋学期）…「英語科教育法Ⅲ」と同様にクラスを2分割した少人数で行う。個人で指導案作成と模擬授業を行い、その後、協議を繰り返し、教育実習に備える授業力を養う。

このように「英語科教育法」を軸にタテにつなぐと同時に、指導の土台となる知識と技能を強化する目的で、教科に関する専門的事項の科目でヨコにつないでいる。目的・場面・状況を踏まえた文法指導を行うための「コミュ

ニケーションのための英文法」、英語教員として音声指導ができるようになるための「英語音声学」などである。

2. 指導案作成と模擬授業を通したトレーニング

上記のように、3年次に履修する「英語科教育法Ⅲ・Ⅳ」では、年間を通して指導案作成と模擬授業を行っている。指導案に関しては、模擬授業の前日までに提出させ、目標の立て方や50分の展開、言語活動の設定など細部まで赤ペンで添削し、授業では受講の学生全員に印刷配布して、今後同様の指摘を受けないように指導している。最初の頃は1つの指導案の添削に1時間以上かかるが、次第に学生たちも書き方を習得していくため、時間は徐々に短縮されていく。

模擬授業は、20分程度の授業実演と25分程度の議論を1セットとし、1コマで2つの模擬授業を扱うが、学生たちから多くの意見がでるため、授業時間が30分程度延長することもある。このため、授業は2時間目か5時間目の設定をしている。この3年生の授業に、まもなく教員となる4年生の有志も自主的に参加し助言をしているため、3年生が緊張感を持つことになると同時に、4年生の成長も実感できる時間となっている。また、大学院国際学研究科には現職教員の大学院生がいて、さらに埼玉県教育委員会から委託を受けた長期研修教員も授業に参加しているため、教育現場に熟知した教員からのアドバイスを受けることができる。私自身は学生のパフォーマンスを温かく見守って指導しているつもりではあるが、なぜか学生からは「厳しい」「怖い」という声が聞こえてくる。



模擬授業について意見を述べ合う学生たち

3. 大学の教室の学びからつなげる教育現場での体験学習

50名程度でスタートした「英語科教育法」も、3年次になると40名程度に絞られてくる。毎年実際に教員になる学生はこの約半数の20名程度であるが、本気で教員を目指す学生たちは、大学の教室から飛び出して教育現場で体験的な学びを深めている。私が講師を務める教員研修会を中心に、各地で行われる小学校・中学校・高等学校での研究授業と研究協議に参加し、児童・生徒の学びと教師の指導を観察し、研究協議では現職の教員と席を並べ、時には現職教員を驚かせるような指摘をすることがある。

また、小学校・中学校・高等学校での学習支援ボランティアに自主的に参加し、授業内でサポートをしたり、放課後に生徒の学習支援をしたりしている。近隣の高校で放課後に行っている「文教大学スタディサポート事業」では、開始当時は数名の高校生だけが参加していたが、文教大学の学生の指導の評判が広まり、最近は30名の生徒が集まる日もあり、大盛況と高校の担当教員から感謝の言葉をいただいている。

4. 各地で活躍する卒業生

国際学部卒業の英語教員は、新任研修や地域の英語教育研究会などの研究授業の授業者として選ばれたり、研究会の委員や事務局として活躍したりしている者も多い。特に研究授業に関しては、授業の助言を行う知り合いの教育事務所の指導主事から、文教大学国際学部の卒業生は本当に素晴らしい授業をするという嬉しい評価をいただいている。授業で生徒も教師も英語を使って多くのやり取りをし、言語活動を中心とした授業を卒業後も実践できていることは、この上ない喜びである。ここ数年山形県の英語教育実践リーダーの先生方の助言を行っているが、県内から選出されたリーダーに数年前の国際学部の卒業生がいた。地域を牽引する英語教員としての期待をかけられていることも望外の喜びであった。

日本中の子供たちが笑顔で英語の授業を楽しみ、英語を好きになり、英語でコミュニケーションを行える英語力につける指導ができる教員を、1人でも多く育てていきたいと思っている。